
蒼王龍の逆襲

壱座右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼王龍の逆襲

【Nコード】

N0667B

【作者名】

壺座右

【あらすじ】

禁断の生命が龍という身体の中に生まれた。全てを憎み、呪う荒々しい、それでいて切ない龍の物語。立ち向かう一人の騎士は彼とどのように対峙したのか。

プロローグ

ここは暗い暗い闇の底。人間のいる世界から遙か離れた地底。空気が淀み、光などは影を潜め暗闇だけがその場を支配していた。所々からおぞましい声が聞こえてくる。人間のものではない。というより他の生物の声とも思えない低く唸るような声は闇の中をも支配していた。

だがしかし、そんな片隅で今にも産まれそうな小さい卵を見ながら歡喜の声を上げる一組の夫婦がいた。赤々とした華麗な鱗に覆われたその巨体は見る者を圧巻しそうな程である。見事に空を仰ぐ角に、太い質感のある尻尾。岩をも噛み砕きそうな牙が非常に禍々しい。

——俗にいう竜である。人間が束になっても敵わない。偉大なる存在。

だが、彼らを恐れているのは一部の、彼らを良く知る人間のみである。竜は争いを好まない。実に知能的で、自らを謙遜し、仲間意識が強くお互いが誇り合い信頼し合う、そんな関係で彼ら自身は成り立っている。

強大な力を持った竜達を恐れるのは、愚かな人間と決め付けてしまってもいいだろう。——所詮、人間は力を恐れ、力に溺れる。——それは、竜達も秘かに解っていた。

紅に染まった鱗を持つ二匹の竜達が自らが産んだ卵を凝視していると、途端にその顔は驚嘆の色を覗かせた。卵の殻が少しわれ、中の光りが漏れてきたのである。それとともに、中から殻を破りだそうともかく赤ん坊の暴れる声が、わずかだが聞こえてきた。最初に出来た風穴から小さな手が空を仰いでいる。その姿が非常に愛らしくて、妻である竜が夫に寄り添った。

——もう少しだ、とでもいうように彼らは固唾を呑んで見守っている。だがしかし、夫婦の願いはすぐにピリオドを打った。

かすれた音が目の前でした。卵が完全に内部から破壊された音を聞いて、無論夫婦ともども眼前の愛しい息子を見た。…が、彼らの顔はいとも簡単に凍りついた。そしてその場を静寂の空気が襲った。まるで恐ろしいものを見るかのように二匹は後ずさる。目の前から力はよく泣く異色の竜がいた。

——ナンダコレハ…？

竜が発した言葉に温かみはない。人間の世界でいう乞食を見るような眼で自分の子を見下している。

それもそうだろう。目の前の小さい子は自分たちと相対色を身に纏い、そして自分たちには無い——人間でいう手のような——物が翼に取り付いていた。それには驚きを隠せない夫婦。何が起きたら赤色をした自分たちからこのような蒼白色の子が産まれてしまうのか。この竜でさえ脳の動きは完全に停止していた。ただただよちよちとこちらに向かつてくる我が子に後退りしながら、睨みをきかすしか出来なかった。——本能のままに。

それに何気なく気付く子は、怯えてぴたりと泣き止んだ。眼から滴が少し溢れている。それでもまだ近づいてくる息子に、父は翼で思わず叩いてしまった。

叩く程度といえど成熟した竜のその一撃は子を一瞬で虫の息までにさせた。ひくひくと体が痙攣しながら、しかしそれでも必死に翼を伸ばし聞こえない声で鳴いている。

それを他所に夫婦は振り返り空の闇に消えていった。翼の音が完全に消え失せたと同時に、彼も眼を閉じた。産まれたばかりの竜でも非常に知能は高い。彼は薄れ行く意識の中で、自分が何を今受けたのかを、正確に判断し、それを頭の底に焼き付けた。

何とか一命を取りとめた彼を待ち受けていたのは悲しい現実だった。周りの竜の容姿とまるで違うのだから周囲から罵声を浴びせられることになった。そのせいか一人でない時はまず無かった。たちまち彼は何も信じることが出来なくなつた。

ある程度大きくなったその竜は次第に蒼白色の体は輝きを増していった。だが、周りから飛び散る止まない罵声に、ついには自己嫌悪に陥った。

積もり積もった彼の怒りと憎しみの心は、彼自身の身体を蝕み、心の中で悪循環を繰り返し、負のエネルギーを増殖させていった。負のエネルギーは力を増し、それは形となってみるみる竜は巨大化しまわりのありとあらゆるものを破壊していった。無論、同族も躊躇無く跡形も無く消し去った。

周囲を滅茶苦茶にした彼は、暴れたりなく飛び立った。見慣れない彼の地へ向かって…。

——全テ、破壊シテヤルサ。ソレガ我ノ運命ナラバ…！

竜の体よりもやや薄い快晴の空に、低くおぞましい声が響き渡った。

第一話

よく晴れた快晴の空、気温、湿度共に高くも無く低くも無い。今日ほど気持ちいい日はないだろう。昨日の豪雨は記録的だったらしい。そのせいか、今日は自然と気持ち良さも増していった。

漆黒の鎧兜を纏った人物が空を見上げる。新鮮な太陽の光りが重たそうな黒い鎧袖を白色に染める。暑くはないが寒くもない気温に、一目見ると暑いだろうと問われそうな風貌にも関わらず、その人物は軽々と歩き出した。

穏やかな風に揺れる草原。平和なイメージがぴったりなこの場所をゆっくりと歩いていると思うと、丘の中央辺りに差し掛かるとピタリと立ち止まった。そして背負っていた自分の身長より少し長太い剣を、ずしんと地面に置いた。こちらも相当重そうだ。さすがに音を鳴らせて肩を回す。そして一息ついた。

二mはあろうかというその大剣は鎧と同じような漆黒に包まれていた。素材も、製造方法もまた似ていそうで、おそらくおなじ職人が作り上げたシリーズなのであろう。とても美しく光りと同調していた。

「さて、始めるか」

兜の奥から、低いそれでいて芯の通った声が聞こえてきた。声は男のものだった。声色は落ち着いていて、ややしつとり感も醸し出していた。この声を聞く限りでは20代前半くらいだと推測できる。若さも多少残りつつ、渋さ加減も出てなんとも言えない声だ。

男は一言呟くと、おもむろに地面の大剣の柄をしっかり両手で握りしめ体重を後ろにかけながらそれを腰の辺りまで持ち上げた。この様子を見るだけでは、この剣を握り始めたのはつい最近だとわかる。両手が微弱に震えていた。割と大きなその男の体格を見ても、この大剣がどれほど重いのが見て取れた。

数秒して男は剣を元あった場所にゆっくりと戻した。そして息を

切らしながら、膝に手をついた。両手に乳酸がたつぷり溜まっているのがわかる。今は苦しいがあと少ししたら快楽に変わる。それが――今丁度行っている。――筋力トレーニングの楽しみ方である。

そしてそろそろ快楽気分を味わえる頃だ。それは予定通り自身の体を支配した。この後も続く苦しい気分を少しでも忘れさせてくれる。一瞬ではあるが十分な時間だ。苦しみ後は快楽。そしてまた苦しみ。そんな一定のサイクルを繰り返していくうちに筋力は着実についていくわけだ。

少々この男のやり方は荒っぽかった。快楽を味わえる時間を裂き、すぐにこの循環を繰り返そうとしている。先程と同じように持ち上げるが、満足がいくほど刀身が浮くことはなく短い時間で地面に落とした。やはり無理がたたるようだ。だが、これが彼流のやり方らしい。いつもこの方法で初対面の武器たちに慣れてきたのだ。

だが今回は彼も自身に鞭を入れることなく、その場に座り込んだ。多少息を切らしながら、空を仰いだ。そして気付いた。先程まで雲ひとつなかったその空に、東の空から暗雲が流れてきているのに。時間が経てば、ここも通り雨が襲いそうだ。

彼は厄介だと思いつぐさま立ち上がり、トレーニングの続きに取り組もうとした。

それは大剣の柄を掴もうとした瞬間だった。彼は寸分の狂いもなく静止し地面に張り付いた。そしてゆっくりと頭を上げて遙か彼方を凝視した。まだ青い空が包んでいるものの、風は止み、冷たい空気が鎧を貫通して生身の身体を襲った。あまりにも静かな雰囲気とそのばを支配した。

彼は体に悪寒を感じていた。何者かの気配が彼の動きを完全にシヤットアウトした。気配がするほうだけに全感覚を集中させた。眼を見据える。何かが見えた。様な気がした。

そのときだった。かすかに見えた快晴に浮かぶ極小の点は次第に大きくなり、段々とその姿があらわになるうとしていた。ここからでも物凄いスピードでこちらに向かっているのが解った。鳥など比

ではない大きさだ。彼は韋駄天の如くこちらに向かって空を飛んでくる物体を解釈しようと、今までの知識や知恵を織り交ぜながら頭を悩ませた。その物体が何かという確証はすぐに持てた。一つだけ頭に隅に新しく残っていた。

それは、猛スピードでこちらに向かってきている。最早目でそれを確認できるほどになっていたが、その物体はそれをする間もないようなほどの急降下で彼を襲った。何かが頬をかすめたが、何とかそれをしゃがんでかわす。それが間近にいることを確認している間にそれは信じられないスピードで彼を強襲した。だがそれかわしたこの男は、相当戦闘に長けていることがわかる。勿論慣れていることも見て取れるだろう。

奇襲を浴びせた物体は、荒々しく近くの岩壁に激突した。そして岩壁は粉々にその上に崩れ落ちた。

漆黒の若武者は、腰を落とし自らの大剣の柄を握って、そしてその方向を洞察した。それとともに蒼白色に輝く物体は自身の体に乗った岩をもともせず弾き飛ばした。そしてこちらに向き直り、先程とは相対的にゆっくりと睨んできた。

男は頭の中を知識の一欠けらで一杯にした。

それは自然に喉を通過する前に口から飛び出た。

——竜だ…！

第二話

両者の目は非常に殺気に満ちていた。だが、男はまだ少しこの状況が掴めないでいた。それもその筈、突然襲ってきた物体が、遙か彼の地で存在していると噂される竜で、なぜそれがこんなところに存在し、自身を狙っているのか。

男は意に介したようだが、一時それを断ち切り、無理やり大剣を持ち上げた。ほんの少しだが、それは軽く感じた。だがそれだけで十分だ、少なくとも今は。第一このような格好をし始める時から、死は覚悟のうえだと自分自身に強く叩き込んだ。今もそれは破っていない。この状況で自らの剣が重いなどとは言っていないのである。

しばらく鬼気を放ちながらこちらの様子を窺っていた蒼白の竜は、一旦その場を飛び低飛行でこちらに向かつて突進してきた。男に辿りつく瞬間竜は喉を唸らせ、体色に似合わぬ真っ赤に染まった炎を吐き出してきた。それを後ろに飛んでかわすも地面に燃え移った竜の吐瀉物としゃぶつはそこら一帯に炎の壁を作り出した。それによつて男の動きも少なからず限定されることとなつてしまった。

竜の追撃は続いている。炎を吐きながら突進した来たものだから、炎に気を取られた男は反応が遅れ追撃に間に合わなかった。まして全身鎧を覆い、先程まで持ち上げるのにも苦勞していた大剣を持つて俊敏に動き回れるわけもなかった。彼も人間である。

竜が目の前に来た刹那、何とか体を仰け反らせるも、どこぞの部分が確実に鳩尾みぞおちに入った。溢れんばかりの血が口から地面に流れ落ちる。それと共にとんでもない吐き気が襲った。すぐに崩れ落ちた意識がとびそうだった。そうなればそれまでだ。何とか耐え抜いただけでもまだいい。鎧がなければ即死だったかもしれない。この場は自分の反応と、鎧の強度を何度も褒めぬいた。

竜は男がもがいているのを他所に未だ空中を飛び回り、ぎろりと

こちらを睨みつけ、それを確認した後、その場を優雅に旋回し、再度こちらに向かってきた。

それを見た男はフラフラと剣を杖に立ち上がり、竜を睨み返した。微弱に震える手を気合いで抑えつけ、大剣を腰の辺りまで持ち上げた。外界に晒されていない彼の眼は死んではない。

お互いがお互いの殺気を物ともせず、正面を切った。

その刹那、男の目の前にはもう竜の牙が迫ってきていた。人間一匹まるまる飲み込めそうなその口が男を襲った。

男は自らの剣の刃を寝かせるように前方に突き出した。それと竜が衝突した瞬間、男の腕に凄まじい衝撃が走った。腕が& amp; #25445;げそうになる程の重圧が脳、精神ともに伝達され、再び吐き気が襲いそうになった。必死にそれに耐え抜き、地面に足を踏ん張らせた。

それでも竜のパワーには耐え切れず吹っ飛ばされてしまった。手を放した自分の剣をよそに後方の岩壁に背中から直撃した。

「ぐああ……」

どろりとした液体が口の中に溢れてきたのが分かった。抑えきれず咄嗟にそれを吐き出す。地の表面に赤い染みができた。

尚も、一直線に男に突っ込んでくる竜に対し男は地面に尻餅をついて沈んでいた。頭ではわかっていても体がそれを抑制していた。眼前ももはやばやけてきていた。最後に竜を確認したのは、自分の鎧に覆われた体を岩盤もろとも噛み砕こうとしている場面であった。もうすでに彼の眼、体では竜自体にはついていけなかったのだ。鎧は何とか耐え抜いていた。だが時間にも限りがあった。音を立てて砕けそうな鎧の悲鳴が体に響き渡った。

だが彼の眼はまだ死んではいなかった。震える手を必死に自分の腰辺りまで伸ばす。いつも装着している鋭利なナイフにその手は何とか届いた。今残っている渾身の力でそれを竜の大きな眼に突き刺した。震える手にしては上出来だった。

それは奥深くまで抉り、ぬめつとした液体がそこから噴出した。

悶える竜は男から牙を放し大きく後ろに退避した。

出血は少量。だが、その化け物を追ひ払うのには充分だった。

竜は怒り、痛み、憎悪などを交錯させながら、空の彼方に消えていった。

第三話

男はそこから動こうともせず——むろん動けるような体ではないが——ただ呆然と竜が去っていった空を眺めていた。

意識は朦朧としていたが、多々の安堵感と気力が何とかそれを保たせていた。

空が暗くなってきた。すぐに雨も降り出した。

男は無意識に兜を取った。白銀に染まった髪に、小麦色に焼けた肌の色が非常に良くマッチしていた。

空を仰いで眼を閉じ水分を含んだ。血液と混ざり合った雨が喉を通る。ほとんど味覚もなく、味自体それ程感じなかった。少しだけ感じる鉄分の味は不思議と美味だった。

鎧のホツクを外した。両肩と両腕が露になる。冷たい空気がとても新鮮で気持ちよく感じた。やはりこちらも小麦色。白いぴちつとしたスーツが腕半分を隠していた。

穏やかに吹く風は短く揃えた髪を揺らした。

もう体力は限界にきていた。着慣れている鎧さえも鉛のような気がした。

雨の音が子守唄に聞こえた。非常に気分が良かった。そして眼を閉じた。無表情な雨だった。あえてそれに身を委ねた。それっきりだった。

その日はまれに見る嵐の夜だった。所々の木々をしならせる強風、それに比例するように起こる豪雨がある王都を襲った。

戸内ではもはや外界に降る雨音のみが室内を支配した。

広い都ではたかが雨だという様にいつも通り人々が行き交っていた。——ただそれも事が起こる前までの話だ。

バロックに彩られた王宮から突然爆発が起こった。それとともに、そこから悲鳴がいつせいに聞こえ出す。簡易な鎧を身に纏う兵士たちが瞬時に現場に集まった。宮殿の一部が無様にも焼け焦がれ破損している。一部といっても直径数十メートルはあろうかという風穴がぽっかりと顔を出していた。——この時、これが一匹の獰猛な竜の仕業とは誰が思おう。

広い敷地を持つ都は数分で壊滅した。木々や建物は無惨にも全焼した。何の跡形もなかった。人々の影も形もなくなっていた。激しい豪雨と強風だけがむじょうにも吹き荒んだ。

第四話

つい先程4日ぶりに外の空気を吸った男は王宮に向かっていた。数日前に瀕死の重傷を負った男だ。ここは彼の生まれ育った都市である。それにもかかわらず、彼はいつも漆黒の鎧を身に纏っている。そして今日も同じように。

約5日ばかり前、失踪状態となった彼はこの街の救援部隊の兵に救助された。この街近辺にある丘であったため彼は一命を取り留めたといっても過言ではない。それからずっと危篤に陥っていたのだ。目覚めた時は街の宿屋だった。全てを思い出したときにはもう鎧、剣を装着してそこを飛び出していた。

ちようど宿を出る時だった。亭主が王宮直属の兵士から伝言をあずかっていると止められた。簡潔に「宮殿へ着てくれ」とのことだった。ありがとう、と一言、そこを飛び出した。

王宮に向かう途中は非常に体が重く感じた。鎧のせいもあるが、それを着始めた時よりも更に重いと体中に伝わってきた。まだ少し痛む体に鞭を打って宮殿に駆けていった。

「よおウィザード。傷はもう平気か？」

見せの準備をしている男店主が陽気に話し掛けてきた。ウィザードは兜を上げ優しく微笑んだ。

ウィザードと呼ばれる男はこの街では顔がとても売れている王都の騎士だ。騎士としての能力はこの国の王、国民ともに知られている。非常に腕が立ち、何度も戦を勝ち抜くために貢献してきた。それに加えて彼の人望も皆に愛される理由の一つだ。何者も寄せ付けない強さと、穏やかなそれでいて頼りになる性格がその人望の厚さを生んでいるのだ。

「みんな心配してたんだよ。ずっと目、覚まさないもんだから」

今度は、別の店の女性が口を挟んできた。ウィザードはそちらにも素直に愛想を振りまいた。

今日はもう宿屋を出てからここまで何組に声をかけられたかさえ、覚えていないほどだ。

「もう大丈夫ですよ。ご心配かけて申し訳ありませんでした」
慣れた様に二人に一礼して、再度目的地に向かった。

王宮に到着したウィザードは数人の兵士たちに声を掛けられた。彼らの上司であり騎士でもあるウィザードは態度を変えることなく全ての人に対応した。もちろん人間としてだ。それが皆に好まれる彼の良いところでもある。

多少なり時間は掛かったが、やっとこさ王への謁見の間へと辿り着いた。

とても広く優雅な造りの中に、一国の王はどっしりと中央奥に構えていた。ウィザードは兜を脱ぐ。

「おお、待つておったぞ、ウィザード。目覚めて早々すまないな」
威厳のある声が届いた。喋ると同時に、弧を描く髭がわずかに動いている。

「いえ、私共も直ぐにでもお話しなければならないことがあります」
て

国王のねずみ色の眉がぴくりと動いた。そして、青色の瞳が揺らいだことをウィザードは見逃さなかった。

「……それはウィザード、お主自身をも瀕死の重傷に陥らせた者のことだな」

お互い目を細めあふ。声が神妙になる。

「そうです。……ですが、あれは——あんなものは見たことも聞いたこともない」

国王は言葉を発することなくウィザードを凝視している。

「竜、蒼い竜でした。それも非常に興奮していました」

ウィザードから目を離し、しばらく黙り考え込んでいた。そしてじつとこちらを見る彼に向け喋り始めた。

「先日、隣都市が壊滅した」

ウィザードは顔をしかめた。咄嗟に驚きの言葉を飲み込んだ。

国王は尚も続ける。

「もしお主の言っておることが正しいならば、この事件もそれに関係している可能性が高い。無論、状況は人間の手では出来んというばかりじゃ。それに現場ではそれらしき鱗も見つかっておる」

「確かにそれは奴の仕業と見てもいいでしょうね」

ウィザードの口調はやけにスムーズだった。先程よりも更に落ち着きがあった。

だがもちろんのこと彼の心の中には驚きと、まだ信じきれない思いが重なっていた。しかしそれも次の国王の口から放たれた一言でさらに倍増していくこととなった。

「……様子を見てきてはくれまいか？」

これにはさすがのウィザードも困惑した。最低、様子を見るだけといつても何か悪い予感が彼の脳の中を走った。だが彼の正義感が奴を野放しには出来まいと心中で大声で叫んでいる。

もし最悪、奴に出くわすと極めて危険であるのは彼自身よく分かっていた。——あの状況、一矢報いて奴を後退させるだけでも精一杯だったのだ。運が悪ければ命を落としていただろう。

だけでも結果は、それはウィザードの闘争心を逆にかりたてた。「わかりました。私どもにお任せください」

その瞬間、国王の眼に輝きが増した。それとともに小さく歓喜の声が漏れた。

「その代わり、他の兵は要りません。私一人で行かせてくださいませ。街の者にもこのことは伏せておいてください。出発は早朝でよろしいですね」

国王が困惑しながらも、しゅしゅ頷くのを確認したウィザードはその場を足早に去った。

王宮を出てきた彼を迎えたのは、しとしとと振りだした冷たい雨だった。

第五話

焼け焦げた街や王都は酷い異臭を放っていた。鼻を劈くようなその臭いは鎧を覆ったその顔でも、強打を受けたような強い刺激が襲ってきた。

さすがのウィザードでもこの任務だけは早々に終わらせて、さっさと帰還してしまおうと思ったほどだ。

辺りを見回すと酷い光景だった。建物たちは全壊し、地面という地面は全て焼き払われ黒々と焦げ付きがびっしり覆い隠していた。まばらではあるが人体の死骸も見受けられた。ほとんどが焼き捨てられた街の人々の中で原形を保っていたものは少数しかいなかった。それらに近づくだけでも、人死体特有の異臭が鼻を襲った。事件が起きてから結構時間も経過しているのだろう。人骨が所々の皮膚を貫通し、痛々しく外気に突起している。眼はもはや腐った卵のようにドロドロと溶け出していた。

あまりの気持ちの悪さに途中吐き出しそうになるのを必死に堪えながら、ウィザードは特に傷が深い王都に向かって歩み続けた。

ここまでの道程、かなりの距離は歩いただろう。だいぶ背負った刀身が軽く感じてきた。足腰も相当自然に鍛えられたはずだ。今ならば、楽にとは言わないが、両手でもしつかりとこの大剣を支えられるだろうとしみじみ感じた。だが、重いものには変わりはなく、足には相当の負担が掛かっていた。ここずっと休憩はしていないが、この物凄い死臭の中、立ち止まる気も起こらず、機械のように歩き続けた。

比較的被害が軽い建物が目の前に現れようとしていた。王都だった。意外だった。最も害が及んでいるだろうと思っていた都は、さすがに他に比べて強度は高いようだ。

もうしばらく歩くと、王宮が近づいてきた。ちょうど正面玄関が見えるほどの距離だ。

そこに来てウィザードはピタリと立ち止まった。異臭はもはや気にもならなかった。ただ呆然とその元々は風格があったであろう正面入口を見据えていた。

「なんだこれは……」

ぽかんとする中、自然と頭の中で描いた言葉が飛び出してきた。

彼は兜を取ってさらにその光景を凝視する他なかった。

第六話

ウィザードはもう既に、城の目の前まで来ていた。

彼の視界は、おおよそ鉄素材で作られたであろう城門で一杯になっていた。その景色に彼は凝視した眼を離せなかった。

この世のものが行つたとは思えないほどの大穴がぽっかりと顔を見せていた。頑丈に築造された城門を貫通し、それは城壁をも貫き、そろそろ日が沈み行く空が裕に見えていた。

数日前に彼自身を襲つた者の仕業だとウィザードは確信するほかなかった。

足の進むほうへと向かった。さらに近づくと荒んだ光景はさらにひどくなつて彼の瞳に映つた。

足を止め、ほぼ原形のない鉄門をまじまじと見つめてみる。焦げが非常に進み、酸化していた。多少時間は経っているようだ。城壁の方にも目を移す。どちらも素材や強度、関係なく同じように焼け焦げていた。熱で溶け始めているところさえある。それに加えて、鉄棒も所々の城壁から突き出ている。周りを見渡すも人影も、動物の死骸すら見当たらない。

それだけでなく、そこら一帯には吐き気が襲うほどの死臭や鬼気が充満していた。ここに滞在しているのはまずいとウィザードはすばやく判断した。やがて夜が訪れ、闇がこの場を支配した時、何が起こつてもおかしくない雰囲気だった。

ウィザードは向き直り、来た道をそそくさと引き返そうとした。その時だった。

背中にぞつと悪寒がはしつた。今までに感じたこともない冷気だ。血筋が一瞬凍りついた。すぐさま振り向く。真丸に開いた風穴のおかげで、空は見渡しやすかった。

夕闇に染まる空に見覚えのある蒼白いシルエツトが浮かんでいた。間違いなくあの竜だった。そのとき彼は自分自身を死神だと思った

ことは胸の奥底にしまいこんでおいた。ウィザードにはまるで気付かないように小さき竜は彼が元来た路を飛び去っていった。

「——これはまずいことになった……」

すぐさままだ滅ぼされていない我が都に帰還しなければ、という思いを募らせた。そして重い足腰を無理やり引つ張り、もう既に遠のいている蒼い影を追いかけながら、全速力で走った。空の化け物には手も足も出ないスピードであつたが、無我夢中で走るしかなかった。周りの荒んだ景色もあれほど嫌つた異臭ももはや彼の感覚には届かなかった。

第七話

ウィザードは約半日かけて自らの王都まで到着した。もう体はへとへとで、ほとんど言う事を聞かないほど苦しかった。今すぐ兜も鎧も大剣でさえも投げ出して、外気に触れたかった。だが、眼前の光景がそうもさせてはくれなかったのは言うまでもない。

街のあちこちで炎が揚がっていて、それは王宮にまで広がっていた。これを起こした張本人は優雅に空を飛び回りながら、次々と火球の礫を下方に放っている。地上にいる兵士たちには成す術も無く、防戦一方の形勢が如かっていた。

ウィザードはどつと体から流れる汗を拭いたい気持ちと、疲れが溜まりきった体に鞭を打ち、王宮に急いだ。それとは反対方向に、人々は我を忘れ逃げ惑う。顔見知りであつた人々もその中には含まれていた。

「ウィザード！どこ行つてたんだ。あれを見ろ」

顔見知りの中年男は顎で空をしゃくつた。止むことなく降る烈火の炎が街を灼熱と化していた。

「俺は最初から今まで逃げずに見てたんだ。奴は物凄いスピードでこの街に突っ込んできて、そのまま何十軒もの民家を蹴散らしながら、空に上昇したと思うとそこから……まあ、見ての通りだ。今の状況さ」

男の顔が夜の闇に比例するように暗くなっていく。民家から立ち昇る炎のお陰で僅かだが、その表情は窺えた。ウィザードは彼の肩に片手を軽く置き、こくりと一つ頷いてみせた。

「心配はいらない。お前も出来るだけ慌てることなくここから遠くに逃げる。全員集まればらばらになることなく、一緒に逃げるんだ。奴が何を狙い、何の目的でこんなことをしているのかは知らないが、必ず止めてみせる」

それを聞いて少し中年男の顔が明るくなったが、それも一瞬のう

ちだった。

「だけどよ、ウィザード。……言いにくいだが、あれはお前に瀕死の重傷を与えた張本人なんだろう？言わずとも皆分かっていたよ。お前に傷を負う時があるとすれば、人間の力を超える化け物が現れた時か、大切な何かを護る時だってな」

ウィザードは痛い所を突かれたと、一瞬しかめっ面になったが、それを無理に抑えつけ、兜を取り軽く笑ってみせた。

「今はその両方の時かもしれないな。心配するな、誰も殺させやしない。奴は必ず止めてみせる」

もう一つ微笑むと、兜を戻し王宮に向かい再度歩き始めた。

「……生きて、必ずまた会おう」

「俺、信じてるぜ、お前のこと。絶対生きて戻って来いよ！」

一人の騎士は兜越しに微笑んだ。一人の男にはそう見えた。そして勇敢に悪夢に立ち向かおうとする漆黒の戦士に、男は敬意の眼差しを向け離すことがしばらく出来なかった。

「——必ず護ってみせる……！」

ウィザードは一人静かに呟いた。火柱を横目に、彼の汗は既に止んでいた。

第八話

王宮に到着したウィザードは少しだけホッとした。まだ被害が少ないこともあった。火球もほとんどがここには落ちておらず、消火作業も進んでおり、まだその原形は留めていた。それもこの宮を囲むように護る兵たちのお陰でもあった。

入口近くまで護衛兵とともに出てきていた国王がウィザードを迎えてくれた。なぜ、こんなところに、とウィザードは尋ねたが、なぜか国王には有耶無耶に答えを返された。

彼が不審に思う間もなく、地面が強く揺れた。おおよそこその城壁に火球が衝突したのだろう。割と遠くで兵士たちの悲鳴混じりの声がここまで聞こえてきた。遠くといっても火が回ったらこの王宮もただの紙くずの様に燃え尽きるだろう。

「とりあえず王も全ての兵を連れてここから避難してください。あれは、あいつはこの兵たちだけでは敵うような奴ではありません」
ウィザードは兜の奥から顔を見せなかった。それでもひしひしと周りの者には強い感情が伝わった。

「いかん。一人では奴には殺せん」

「殺すのではないのです。この都を護るんです。人々を護るんです。王宮唯一の大砲は撃てない、あの距離では弓も届かない。私共にやらせて下さい」

「しかし……」

ウィザードは兜を取り顔を見せた。その表情に恐れもなければ、迷いもない。

「もしも私が死んでも、この都が落ちようとも、人々が生きていればそれは再建できます。……王、どうか私共に命令を」

国王は下を向いて黙り込んでしまった。

また、地面が揺れた。先程よりもさらに強さは増していた。どんな炎も近づいてきているかもしれない。ここもすぐに危険になる

だろう。

国王もウィザードも微動だにしない。しかしすぐに王は顔を上げた。その眼にはもはや迷いも無いように見えた。

「ウィザード、奴を止める。この都、そして人々を護るのだ」

ウィザードは清しい表情を浮かべ、顔を兜で覆い隠した。

その刹那、めりめりつと天上からする嫌な音が彼らの耳に微かに届いた。その零コンマ一秒間だろうか、その間に音がした方向の壁が崩れ、竜が姿を現していた。それはその物体が空から猛スピードで降ってきたような感覚ともいえた。

ウィザードは瞬時に、鍛え抜かれた反射神経を頼りに背中から大剣を取り出し、蒼竜に向けた。それと同時に急降下した竜の上下の牙の辺りとその剣は衝突した。味わったこともない重圧と、体中の神経がはち切れそうな感覚に襲われた。

それでも彼は周りを見回す。

「早く逃げてください！」

眼前で確認するその竜の巨大さと、威圧感に戦慄しながらも、王は一つ頷き、護衛兵に囲まれ宮の入り口から外に出て行った。

それを確認したウィザードは力を入れ直し、目の前の竜を押し出した。そして一瞬の隙をつき、——今はどの部分でもよかった——竜めがけて大剣を薙ぎ払った。ここ数日の疲労もあってか、それはとても重く鉛のように感じた。何とか振り抜いたが、竜は意図も簡単にそれを見切り後方へ飛翔してかわした。

振りぬいた剣は地面に落ちた。何とか柄は握っているものの、それだけでも精一杯だった。やはり背中に背負っている時と今とでは雲泥の差があった。疲労はもう既に限界に達していたのだ。

後退した竜はバインドボイスを発した。女性の悲鳴の何十倍もあるだろう、その鋭いガラスを引っ掻いたような声音はウィザードの耳を、鼓膜を劈いた。途端、意識が遠のいた。——物凄く重い痛みはその後やって来た。

第九話

一瞬気がどこかへ飛んでいた。視界がはつきりと戻ってくる頃には、ウィザードは数十メートル吹き飛ばされ、壁面に全身をぶつけ、ぐったり地面に平伏せていた。

目の前でゆつくりとこちらの様子を窺っている竜が先程、咆哮をあげたところまでは記憶がある。そのあと何か——おそらく奴の翼か尻尾かその辺りだろう——が、ウィザードの鳩尾にクリーンヒットしたのだろう。当たったと思われる腹部が異常に痛んだ。しかも奴の何気ない鳴き声によってウィザードの鼓膜は使い物にならなくなっていた。さらに最悪なことに、疲労感と体中に及ぶ激痛が彼の視界をも蝕もうとしていた。

その状況は正に修羅場の中の修羅場であつた。一瞬の間でさえ、生死を分けるだろう。ウィザードは死を堅く覚悟した。何度もなくぐつてきた修羅場では、いつもこうしていた。こうすることによって、多少の無茶は何の躊躇も無く出来るというものだ。

ぼんやりする視界を竜に注ぐ。竜もそれに気付いたのか、こちらをさらに睨み、有り余る殺気を否も応もなくこちら側に飛ばしてきた。

ウィザードは震える足を無理に無視し、剣を杖によるよると立ち上がった。何とか大剣を構えてみせるも、その姿にはもはや威圧感などというものは無に等しかった。

だがウィザードはこの国唯一の英雄である。このぐらいの傷ならば今までに何度も経験してきたことであつた。この状況を打開するためには、彼は今までの経験、体験を頭の奥底から搾り出した。——それは、まずは落ち着き冷静になることが、課せられた最大の脳からの使命だつた。

文字通り冷静になり、竜の様子を見ようとする。今にも飛び掛つてきそうなほどには興奮はしていない。むしろ落ち着いている。初

めて争い合った時とは、空と地ほどの差だ。そのとき何とか一矢負わせた古傷が、竜の片目の瞼に痛々しく刻み込まれていた。今度はあんなに運良くは行かないであろう。口からは紅い炎が少量顔を出しており、低い唸り声が僅かだがここまで聞こえてきた。この程度の観察なら、数秒で彼は済ませるまでに鍛錬は積んでいた。

さて、お次は、と更なる課題を与えてもらおうと脳に問い質すときであった。痺れを切らしたかのように、竜は自身の全長ほどもあるような巨大で優雅な翼を天高く舞い上げたかと思うと、それをそのまま羽ばたかせ低空に全体重を浮かせた。羽ばたく翼からはあまり鱗が散乱していないところを見れば、あまり興奮もしていない。この状態ならまだそれ程危険というまではなかった。最低この五体不満足な体でなければの話だが。

見たこともない生命体の知識はまるで無かった訳ではない。古代から存在していると仮説されていた生物だけあって、その類の書物はウィザードの勉学の感情を沸き立たせたのだ。もちろん、この宮でよくそれらを見ていたの言うまでもない。———そのためか、少しばかりそれらが火の柱に包まれ、灰になることが、惜しくて仕方なかった。

巨大な身を翻し、急激な速度でこちらに飛び込んでこうとしている竜に対し、ウィザードは僅か一秒でも惜しいようにそこを動くせせず、自身の脳と問答していた。

———さあ、課せろ。次に俺がすべき行動はなんだ。

刹那、轟音と共に幾平方メートルもの壁面が無惨にも崩れ去った。だが、それぐらいではまだこの王宮は崩れ落ちようともしなかった。竜が粉々に砕いた壁面から現れた風穴から、再度それは飛びながら戻ってきた。ついさつきとは変わり、ゆったりと飛翔しながら。無論その体にはダメージはない。この竜の強固な甲殻は、多少の落石ぐらいには裕に耐えられるようだ。ゆっくりと着地し、辺りを見回すも、先程の剣士は見当たらなかった。しかも、先程は感触も感じなかったかのように、不思議そうにきよろきよろ眼を動かしてい

る。

その時だった。急に冷氣交じりの殺気が足元から竜自体の体を襲った。

加えて、首と胸部の中間辺りから激痛。そして多量の出血。痛み耐え切れず、ふらついたが何とか持ち堪えた。竜は何が起こったのか解せず、片目で視界をその場全体に行渡らせようとした。だが、それは前方一直線を凝視することとなった。

漆黒の鎧重騎士が、大剣を軽々と肩の上で寝かせているではないか。先程意気消沈としていた人物とはまるで別物。体を翻し、こちらを兜越しに睨んでいる。それだけで今の竜には恐怖すら募らせた。目の前の男は静かに呟く。それは、竜の聴覚には痛烈な打撃にすら感じさせていた。

「俺の今に至るまでの死闘の結果、第六感。それが答えさ。この王都を襲ったことを呪え、竜よ。我が漆黒の炎で貴様に引導を渡してやる」

第十話

竜の首の下辺りから流れる血は止まらなかった。それどころか、それは増える一方で、床には既に夥しい量の血で一杯になっていた。滴るその液体はどす黒さを含んだ真つ赤な、見ていてこちらが卒倒しそうなほどの色彩を施していた。

だが竜は動こうともしない。顔には焦りの色も見えないほどだ。これほどの強大な力を持った者が、なぜこんなちっぽけな人間のようなか弱い生物を標的にするのがウィザードにはまるで分からなかった。

——クッハッハッハ……。引導ヲ、ト八人間風情が大キク出タモノダナ。コノ程度デ我ヲ追イ込ンダツモリカ？笑ワセテクレル。

竜の声であるうか。顎が僅かに上下しているのでそうだろう。耳がほとんど聞こえないはずなのに、頭の中にそれは直接入り込んできて体全体に行渡らせているような感触がウィザードの心を異常な感じにさせた。低い深い声色だ。——無論、それは声といっているかわからない奇妙な感覚であつたが。おぞましいという言葉がよく似合う、背筋もぞつとした。それ以上に竜が我々の言葉を話せることに激しく動揺していた。竜自体、我々人間より遙かに凌駕する知能を持った生物であるとはウィザードも本でよく知識として取り入れていたものだが、まさか人語を理解するまでのものと、彼は今この状況だけが敬意を賞した。

「俺の言葉が理解できるなら聞いてくれ。なぜあなた方偉大なる竜が人を襲う？もちろん、これは書物の中での話ではあるが、竜はむやみには人を襲わないというし、我々の住処をも火の山にはしないという」

——……。フン。ソレハ所詮仮説デハナイカ。人間ニモアルヨウニ、モチロン我々ニモ個性トイウモノハ存在スル。皆同ジトイウワケニハイカンノダヨ。コノ世ノ中ノ摂理トイウモノダ。静カニ暮ラス龍

モイレバ、人間ノ腐ツタ肉ヲ好ムモノモイル。ソレハ仕方ノナイコトナノダヨ、小僧。自然ノ摂理ニハ誰モ逆ラエン。万物ガ今モ存在スルヨウニナ。

「……違う。違う！」

——何が違ウカ、小童！

二人のトーンが次第に高くなる。竜も興奮したように両翼を持ち上げる素振りを見せる。尚も出血は止まることなく流れている。

「私には分かる！貴方のやっていることは、その摂理というものに反している。竜が人間を襲うなど前例がない」

——黙レ、小僧ヨツ！

「摂理を外れるものには必ず理由がある。大も小も関係なく、貴方のその心を闇に染めたのは何か！貴方が怒れる理由は何か！」

ウィザードは既に兜を取っている。大剣も手にしていない。全くの無防備で、自分よりも数倍大きい竜に力説する。彼の瞳の鋭さに、竜は少しばかりたじろいだ。

——黙レト言ッテイル！ソノ忌々シイ顔、喰イ千切ッテクレヨウカ！

竜の声がウィザードの頭に届くか届かないかの瞬間だった。すぐ目の前で爆発が引き起こった。爆音は聞こえないが、目が見える分それは確認できた。標的は竜だった。非常に興奮していたためか、竜には死角と大きな隙が出来ていた。それは的確に竜の右翼を捉えていた。その部分から鮮血が勢いよく飛び出した。

その光景を見ると、誰が想像しても我が軍の味方であろう。援軍でも来たのか。入口の門の方を見ると、非難したとばかり思っていた国王が、両隣にある大砲を囲む兵たちに指示を出していた。

「第二波、放て！」

その王の声と共に大砲の弾が勢いよく発射され、再度竜目掛けて飛んできた。

その時ウィザードは鼓膜がだいぶ回復してきていたのを確認した。そしてウィザードは兜を頭から放り投げ、剣の柄を強く握り締め我を忘れ駆け出していた。竜の目の前まで行き、標的に当たる寸前

の大砲の弾を間一髪のところまで真つ二つに切り裂いた。二つに別れた弾は竜を避けるように弧を描き、側面の壁に衝突し爆発した。それと共に、僅かな地鳴りが起こる。ここもそろそろ長くは持ちそうにない。

——小僧……！

「ウィザード……！何を……！」

その行動には後ろにいた竜も、前方の王もその周りに群がる後輩の兵士たちでさえ驚きに叫喚をあげた。自分でも最初は何をしたのか分からなかったが、我を取り戻した後の彼は後悔などは一切なかった。

「私は最初に存じ上げました。殺すのではないと、ここを護るのだ、と」

「何を馬鹿なことを言っておる！その化け物を殺すチャンスは今しかない、やるのだその剣で、喉をかき切るのだ、ウィザード。今やらなければ、そ奴はまたここに現れ、都を焼くぞ。ウィザード、大切なものを護るんだろう？」

竜はじつと固唾を呑んでその二人のやり取りを見守っている。眼前のウィザードを噛み殺す好機はいくらでもあるはずだが、竜はそんな様子も見せようとしない。

「確かに護ります。だけどそれは今はもう終わったことです。この竜にはもはや戦意はありません」

「……何だと、本気で言っているのか、それを」

「ええ、本気です。私には分かります」

一国の王は多少イラついてきた様だ。唇が僅かに震え、屈曲してきている。

「いいからそこを退く^どんだ、ウィザード」

「……できません」

「……わかった。これが最後の忠告だ。どくんだ、ウィザード」

同じ台詞にアクセントをつけた。それにゆっくりとした滑らかな動きも加えさせた。

「……できません！」

「……ならば、仕様がな。後ろの悪魔もろとも灰にしてくれるわ！」

国王は手を肩の高さまで挙げ、一人と一匹に指をさした。

——フン、ココニキテ本性ヲアラワシオツタカ、愚力ナル人間メ。

「王！御止めください！なぜ無駄に生き物を殺すのです、枯らすのです。そんなことをしては人間の価値観を下げるだけです。なぜ攻められたら攻め返すのですか、やられたらやり返すのですか。なぜ共に歩み行く道を探さないのですか」

——今ノ奴ニハ何ヲ言ツテモ無駄ナヨウダ。所詮人間トハソノヨウナモノヨ。

一直線に躊躇も無く飛ばされてきた砲弾に向かい、竜は自らの火球で応戦する。放たれた炎は、的確に数個ある砲弾の最前列のものに直撃する。それが衝突し、爆発が置き、他の砲弾にも誘爆する。放たれた砲弾は全て、ウィザードと竜に直撃するのを防いで、木っ端微塵となった。

「少なくとも俺はそうじゃない。そうだろう？」

目の前の光景にも眉一つ動かさず、優しさの含んだ声で尋ねてくるウィザードに戸惑いを感じつつ、竜はその場で飛翔し、自らが開けた風穴へと飛び去ろうとしていた。

「逃がすな！撃て、撃てえ！」

また数個の砲弾が発射された。今度の標的は竜のみだ。

——マタ会ウ機会ガアレバ、答エヲ聞カセテヤル。約束ダ、ウィザード。

そう言い、同時に砲弾に向けて火球を数個飛び散らせた。傷が痛むのか、ほとんどが命中せず、逆に数個の砲弾が竜の翼、胴、脚などを襲い爆発を起こした。

——グウウツ！

「ああ……！」

竜の口籠った悲鳴と共に、ウィザードもまた口から自然に声が零

れる。

それでも尚、竜は両翼を必死に羽ばたかせながら、夜の闇に消えて行った。途轍もなく冷たい風がウィザードを襲ったような気がした。

悔しい表情の国王とその部下、それに呆然と竜が姿を消した大きな穴を覗くばかりのウィザードの姿だけが、その場に残った。不気味な静けさを放つその場に、所々から覗く風穴から吹く冷気がその場を通り過ぎた。

第十一話

硝煙が晴れた王宮内部、所々からする焼け焦げた臭いと、嗅いだ事のないような強い血の異臭が鼻を劈いた。不健康な空気がその場を取り巻く中、ウィザード、国王、その部下の兵士たち諸々が露になった。

「ウィザード。いくら貴様とて、許しがたいことぞ。なぜ、我が命に背いた」

国王がウィザードの方に歩み寄ってくる。その声は、静かで落ち着いてもいるが、どこか物々しい。

なんとなく耳に入った言葉にウィザードは視線を国王に流す。ずんずんと我が物顔で近寄ってくる。ウィザードは彼に気付かれないように、小さく溜め息をついた。そして彼一人に聞こえるか聞こえないかぐらいの声で呟いた。

「理由は先程、私自身が言いました。もうお忘れになったのですか？」

ウィザードは言葉と目使いで軽く我が王を罵った。普段の彼なら、絶対忠誠だ、こんなことは言わなかったはずだ。

「ウィザード、貴様。処分は覚悟のうえであろうな？」

王はぴたりとその場に立ち止まる。ウィザードとの距離は多少開いていた。

「私は今まであなたに忠誠を尽くしてきました。ですが、先程見せたあれは、あのようなことが王の本当の姿だとしたら、私は今すぐにそれを断たなければなりません」

非常に落ち着いた声色だ。だがその中には怒りとも、不信感ともつかないものが含まれていた。

「質問に答えろ、ウィザード」

「ならば私共の質問にも答えていただきます。王、なぜあなたはそんなに簡単に生き物を殺めることができるのですか！なぜ、戦う意

思のないものを無理に押さえつけようとするのですか！」

「我々も好んでやっているのではない！あの状況では仕方のないことではないか。奴を殺さんと、次はこちらがやられるではないか。」

二人は次第にヒートアップしていった。ようやく声が聞こえるようになった周りに兵士たちは、急におどおどし始めた。

国王は一つ間を置いた。徐々に冷静さを取り戻しているようにも見える。

「ウィザード、お前にはその点も置いて我が道を共に歩んでいるとばかり思っておった」

ウィザードは俯いた。

「確かにそれも考えようと努力はしました。だけど考えているうちに、その思いは淀み、先程の現実を自身の身を持って体感した時、それは王への不信へと変貌しました」

「……………」

王は次の言葉に詰まってしまった。ウィザードはその隙を逃さず、僅かずつ気付かれないよう後ずさる。

「ウィザード、私はお前を手放したくはないのだ」

悲しみの声をあげたのは王だった。情でも誘っているのであろうか。その眼に悪意が含まないかをウィザードはまじまじと見詰めた。だが結局それは今、どうでもいいことであつた。彼への忠誠心無くしたウィザード自信にとっては。

王への返答をせず、それでも少しずつ後ずさる足は止めなかった。向かっている方向には、ぽっかりと開いた風穴がある。大砲の流れ弾で開いた、人一人ぐらい裕に通れる穴だ。

ウィザードは傍らに転がっていた兜をなんなく拾い、そこで立ち止まり、自身の腿辺りに手を伸ばした。無論その行動の気配は消し去っていた。

その時だった。

「王！例の竜が隣丘に墜落したとの通報が入りました」

門辺りにいた兵からの王にとっての朗報が飛び込んできた。

「すぐに迎え撃て！無理はするなよ、出来るだけ追い込んで止めを刺せ！」

「はっ！全軍出撃い！誤って砲弾を落とすなよ！」

指揮官らしい兵の返事と、指示が飛んできた。その兵の顔にも見覚えがあつた、ウィザードの部下で後輩であつた。ウィザードは眉を一層深く顰めた。

「ウィザード。お主もこれに参加して見事奴を打ち倒すことが出来た暁には、先の事柄は水に流してやってもよいぞ」

何を馬鹿な、ウィザードは出掛かった言葉を口を紡いで止めた。

「私には結構なお話です。あなたにはほんとと愛想が尽きました」

ぎらつと殺意を込めて少し離れた王を睨んだ。それに少し怯んだのか、王は後ずさる。

「ええい、ならば貴様も生かしておくわけにはいかん。大砲、用意！」

少数残っていた兵たちが一基の大砲に火をともしはじめた。だがウィザードは少しもそれに怯える様子はない。それどころか、王を睨んだ眼を放さずに殺気を飛ばし続けていた。

「……先程の質問の答えを今ここにお出しいたしましょう」

「……何？」

腿に仕込んだダガーを中指と薬指で掴み取り出した。そしてそれを勢いよく入口方面に向かい、何の躊躇いなく投げた。

それは猛スピードで、地と平行に直線を描き、真つ直ぐに飛んでいく。途中、国王の頬を掠めそれは、一瞬の内に目的地まで到着した。その小さな短刀は、大きな深い闇が広がる穴に吸い込まれたように入り込んだ。大砲の発射穴だ。その途端、大きな爆発が起こりその周りにいた兵士たちを巻き込んだ。

その行為に驚いた王は、ウィザードの名を大声で叫びながらこちらに速足して近寄ってきた。

ウィザードはそれから逃げるようにそそくさと、向かっていた風穴に走り去ろうとしていた。その前に一つ忘れていたことを付け加

えた。

「――答えはノー。処分や制裁を受けるとしたら、私からしたらあなたですよ」

そう言い残して彼は素早く穴の向こう闇に消えた。

未だに吹き荒ぶ風は王の心の炎を消沈させることはなかった。

第十二話

闇が一層強くなる中、竜は傷の為か丘陵で一休みを取っていた。

——ヤレヤレ、私ノ体モソロソ口潮時カモシレンナ。

竜は自身の体の傷をまじまじと隅から隅まで眺めていた。全身から夥しい量の血が流れていた。両翼は特に酷く血が滴っている。ほとんど原色を留めていない、血で真っ赤に染まっている。しばらく時間を置いて回復をはからないと、このままでは低空飛行すら難しいだろう。爆炎によって片脚は使い物にならないぐらいの傷を負った。今は寝そべっている体勢ではあるが、血は絶えず地面に落ち、時間が経つに連れ草の緑色を真紅に染めていつている。痛みはあるが、だいぶ傷も回復してきた。竜の再生機能は人間よりも何倍も速い、ある程度の骨も折れてはいるだろうが、多少の痛みならすぐに和らげることが出来る。だが、今回は痛みは取れても、傷が縮まっていくのがとても遅いと感じた。出血は止まる様子もなく、流れ続けている。このままでは血が足りなくなり死んでしまうかもしれない。既に眩暈もしてきている。

竜の感度の鋭い耳に、人間の土気の声が聞こえだしてきた。人数までは分からないが、多数。こちらに近づいてきているのが分かった。直感的に閃いた。恐らくは先程襲った王都の兵士達だと。当然だ、押さえ付けかけた脅威をみすみす逃すわけもなかった。

まだ遠いとはいっても時間の問題だ。すぐにそれは現れるだろう。竜は覚悟を決めた。よろよろと体を起こす。ふらふらする脚を無理に押さえつけた。

「あまり無理はしない方がいいんじゃないのか」

竜は驚いた。すぐ隣にいる男の気配は感じる事が出来なかった。いくら自分が弱っているとはいえ、このような経験は稀にも見ない。兜は外れていた。

——ウィザード。

ウィザードは自身の脳に直接入ってくる言葉に心底安心した。非常に優しい声だ。多少だが、心は開きかけてくれているらしい。だがそれも弱々しく、明らかに体力が底を尽きそうな事が分かった。無理もなかった、あれほどの砲撃を直に受け、それでも尚これだけの血を滴らせながら平然と立っていることがウィザードには信じられなかった。竜の存在の大きさを、目の前で再確認した。

「俺はあの国を裏切った。だが後悔はしていない。俺は俺自身を正しいと認識している」

——助ケナド要ラン……！

正直のところ竜は意地を張ってしまったと一瞬思った。だが敢えて心の中でそれに首を横に振った。

「俺は別に貴方を助けたいと言っているわけではない。俺は俺自身の尻拭いを今この場で行おうとしているだけだ。だけど、それも俺一人では到底無理な話だ。……力を貸してくれないか？」

——……………。

竜は突然のことに口籠ってしまった。

「……名前を、教えてくれないか？」

目の前の人間はいつも突然すぎる、と竜は苛ついたが、不思議とそこには安堵感も混ざっていた。というよりそちらの感情のほうが、圧倒的に前者を上回っていた。

——私二名ハ無イ……。

「……………！」

ウィザードは絶句してしまった。問おうとしても次の言葉が見つからなかった。だが、答えは自然と返ってきた。

——私ハドウヤラ竜族トイウヤラノ亜種、変種デアルラシイ古イ記憶デハアルガ、私二モ親トイウモノガ勿論ノヨウニ存在シタ。ダガ、私ヲ見タ奴ラハ……。

ウィザードは察して話を中断させた。経験は無いが気持ちは痛いぐらい分かった。差別というものが竜たちの中でも発生していたことを聞き、彼は驚いた。しかも身内という話に彼は胸を痛めた。竜

という存在は書物では関心を持っていたが、体色のことまでは頭が回らなかった。

「それでは人間と同じではないか。汚れた人間と同じではないか」

——人間ト同ジヨウニ、竜ニモ感情トイウモノガ備ワツテイル。感情ヲ持ツトイウコトハソナモノダ、所詮ハ生物。賢イモ美シイモ、強イモ弱イモ、ソナコトハ関係ナイノダ。コレガ現実ダ。ソシテ私ノ体モナ。

一瞬竜が瞼を伏せたような気がした。

「貴方の体……？」

——今回ノコトデヨクワカッタ。私ノ体ハ亜種ヤ、変種トイウ綺麗事デハ成リ立ツテオランヨウダ。

「……？」

ウィザードは眉を顰めさせた。

——呪イトイウ類ダロウ。モウ既ニ傷ハ膿ミ、出血ハ止マラン。痛ミモ徐々ニデハアルガ再始動シテキテオル。体ノ内部カラ腐ツテキテイルコトガワカル。スグニ虫ドモモ群ガツテクルダロウ。四肢モ殆ド使イ物ニナラナクナツテキテイル。放ッテイテモ、モウ死ハ間近ダ。逃レラレン。コレモ摂理ダ。

「……そんな節理は、無い」

——ウィザード、コレガ私ノ運命ダ。コノ世ニ命ヲ請ケル資格ガナカッタノダ。

ウィザードの表情が徐々に険しくなっていく。それと共に地鳴りが激しくなってくる。兵士たちももう間近に迫ってきているのだろう。

「運命は定かではない！定めなんだ！自分で起こすものだ、他人が決めるものではない！たとえそれが神であつても」

その言葉に竜の失われかけた瞳に輝きが戻った。よく見ると眼も膿んでいる。それに竜の体からはもう美しさが消え、黒ずんできていた。竜自身が呪いと主張するものの侵食は速度は相当なものなのか。

——…定メ、チカラ、ワタシノオモイ。
殆ど何を言っているのかが分からなかった。蝕まれ苦しんでいるのだ。

「見つけたぞ、ウィザード」

どこかで聞いた声だ。につくき王だ。

大勢の兵が同時に到着した。全軍を統率するように最前には王がどつしりと構えている。

竜はそれを確認すると、待ち構えていたように、ふわりと低空に浮き上がった。傷むであろう両翼を羽ばたかせている。それを驚いたような表情で見るのは、ウィザードだった。

——ワタシノサダメトヤラハドウヤラ、コウイウトコロデチカラヲフルウコトシカ……デキナイラシイ。……ウィザード、オマエハイキ……口。私ノヨウニ……ハ、ナル……ナ。オ前ノカハ、……タイセツナモノヲマモルタメニ、信念ヲツラヌクタ……メニ、……後半はよく聞こえなかったが、ウィザードの眼には涙が浮かんでいた。

——…ウィザード、イイ……名……ダ。……オマエ……ハ、……生……キ口。

ウィザードの頭に刻み込ませた後、竜は何十基もある大砲目掛けで吹っ飛んでいった。

最後に竜の片目に少量の滴が見えた、かもしれない。

ウィザードは竜とは反対方向の丘を駆っていた。竜の覚悟を無駄には出来なかった。本当はすぐにでも加勢したかった。

彼は涙でぐしょぐしょになった顔を兜で覆い隠し、走り続けた。朝焼けの空に向かい止まることは無かった。最後に振り返らずに、さようなら、と告げた事など誰が知り得ようか。

第十三話

ここは暗い暗い闇の底。人間のいる世界から遙か離れた地底。空気が淀み、光などは影を潜め暗闇だけがその場を支配していた。所々からおぞましい声が聞こえてくる。人間のものではない。というより他の生物の声とも思えない低く唸るような声は闇の中をも支配していた。

ここでは竜という生物が生活している。人間よりも遙かに雲の上の存在。だが、彼らはそんなことなど気にも留めない、有り余る知識の中には人間という二文字は存在しない。彼らは外の世界を知らない、人間という存在も知らない。彼らはここで生まれ一生をここで過ごし、安らかにここで死んでゆく。それが彼らの摂理だ。偏狭であるため、ここには部外者は姿を現さないし、侵すものもない。どの竜たちもそう信じていた。疑うものもいなかった。一人の怒れる漆黒の騎士にそれが意図も簡単に破られるなど、誰が思っただろう。

——もう何匹の竜の首を狩っただろう。あまりに闇が深くそれは確認できなかった。

その闇に同化する様な風貌の男を取り囲むように竜は所々から群がり、応戦していた。鬼士は無傷でばったばったと襲い掛かる竜たちを切り刻む。まさに鬼人の如き進撃だった。

だが一方に数は減ることなく、むしろ増加してきているほどだった。援軍がまた現れたかと思うと、空中から炎を放ってくる。そのまま強襲してくる竜さえいた。

先に悲鳴をあげたのは、騎士でもなく竜でもなく、たった一本の大剣だった。不意に空中から突っ込んできた竜を受け止めた瞬間、それは無惨にも粉々に砕け散った。追撃を受けた黒騎士は後方に勢いよく吹っ飛ばされた。

じりじりと何匹もの竜が距離を詰めてくる。男は死刑台に一步一

歩近づいて行くような感覚に陥った。

暗い闇に煌くいくつもの殺気交じりの瞳に、僅かだが彼らの身体が見えたような気がした。真っ赤だった。燃えるように紅い美しい鱗であった。

——…成程、これが竜というものの本当の姿か。

この状況で、なんとなく安堵の溜め息が漏れた。新しい記憶に残る一匹の竜を思い出したのか、兜の奥で少し微笑んだ。

体は動かない。竜の一撃に自慢の鎧は耐えられなかった。騎士は兜を取り、顔を露にした。吐血しているが、顔に焦りや恐れは全く感じられない。

「たとえ運命の内容はどうであれ、事は失う瞬間に輝きが最大限に増すものさ」

騎士は空を仰ぎ、小さく呟いた。

その瞬間、竜たちは一斉に低空から上空から騎士を襲った。彼に反撃する様子は見受けられない。

男は最後に呟いた。

「これで本当の最後だ。さようなら……」

その表情は優美な誇らしさを帯びていた。

エピソード

ここは暗い暗い闇の底。人間のいる世界から遙か離れた地底。空気が淀み、光などは影を潜め暗闇だけがその場を支配していた。所々からおぞましい声が聞こえてくる。人間のものではない。というより他の生物の声とも思えない低く唸るような声は闇の中をも支配していた。

だがしかし、そんな片隅で今にも産まれそうな小さい卵を見ながら歡喜の声を上げる一組の夫婦がいた。赤々とした華麗な鱗に覆われたその巨体は見る者を圧巻しそうであつた。見事に天に伸びた角に、太い質のある尻尾。岩をも噛み砕きそうな牙が口の中から身を覗かせている。

——俗にいう竜である。人間が束になつても敵わない。偉大なる存在。

だが、彼らを恐れているのは一部の人間のみである。竜は争いを好まない。実に知的で、自らの力を過小評価し、仲間意識が強くお互いが誇りあう、そんな関係で彼ら自身は成り立っている。

強大な力を持った竜達を恐れるのは、愚かな人間と決め付けてしまつてもいいだろう。——所詮、人間は力を恐れ、力に溺れる。

紅に染まつた鱗を持つ二匹の竜達が自分たちが産んだ卵を凝視している、途端にその顔は驚きに変つた。卵の殻が少しわれ、中の光りがこちらをのぞいた。それとともに、中から殻を破りだそうともかく赤ん坊の暴れる音が、わずかだが聞こえてきた。最初に出た風穴から小さな手が空を仰いでいる。その姿が非常に愛らしくて、妻である竜が夫に寄り添つた。

——もう少しだ……。という夫婦の願いはすぐにピリオドを打った。かすれた音が目の前でした。卵が完全に内部から破壊された音を聞いて、無論、夫婦ともども眼前の愛しい息子を見た。その途端、二匹の竜は凍りついた。と、それも一瞬のうちであつた。

——…何ト美シイ。

目の前の蒼白に輝く、自分たちとはまるで違う体色をした竜を見て、彼らは非常に喜んだ。

すぐさま我が子を翼で覆い、持ち上げあやした。幼い竜は無邪気に笑っている。

——コノ子八神様が私達二授ケテクダサツタノヨ。

妻の竜が嬉しそうに夫に寄りかかりながら言った。夫も妻に寄りかかり笑顔を絶やさない。

それに駆け寄ってきたのは別の竜たちだった。多数の竜たちは周りで同じように喜んでいる。皆幸せそうに笑っていた。

——今日ハ宴ダ！

一匹の竜が促すと、周りの竜たちは喜んで雄叫びをあげた。

幼い蒼い竜は母親の両翼の中でゆっくりと重い瞼を開いた。そして誰にも気付かれる事の無いように小さく呟いた。

——ウィザード（神よ）、アリガトウ……。

そしてゆっくりと眼を閉じた。闇の底には日が照らしていた。

エピローグ（後書き）

あとがき

『もし、人とは違った、または障害を持ってこの世に生を譲り受けたとしたらあなたはどうしますか？』

わたしは本音で答えるとしたらこう答えるでしょう。

「人に迷惑をかけてしまいかもしれませんが、わたらしく生きていきます」と。

人は生まれながら環境を選べません。それによつて貧富の差が生まれたり、能力に良し悪しが生じるものです。得意な体質や力を持った者は、世間から忌み嫌われます。ですがそれに対抗しようという意識は、人間誰しも持っているものです。

この作品では、そんな意識を悪い方向へと使ってしまった生き物の苦難を描きました。運命を非難するものの末路は必ず悪い方へと進むのだと思います。それを少なからず折り曲げようと奮闘したのが、主人公であるウィザードです。

あなたは素直に生きていますか？世の中に楯突いていませんか？あなたがもし間違った方向へと進んでいたとしても、それを変えてくれる人は必ずいます。人間というのはそれぞれの感情を持っているのだから。

この作品は以前他サイトで紹介させていただいたものを、リメイクしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0667b/>

蒼王龍の逆襲

2010年10月8日15時03分発行